

御国の完成に関する黙想
— 憐れみに応答する者、終末の証の完成 —

鈴ヶ峰キリスト福音館
聖書研究会 考察
2025. 9. 26

ルカの福音書 14 章

ルカ 14:7 に記された「上座のたとえ」は、ただ謙遜を勧めるためだけのみ教えとは思えません。本章もまた、これまで同様、終末の御国の完成(花嫁の整え)に関する視座において、注意深く考察したいと思います。

「上座のたとえ」は、御国の招きの場(終末の憐れみの場)で、主のしもべの心のあり方を導いています。末席に座る者の姿に、主の憐れみに応える者の歩みが映され、主のまなざしによって引き上げられる者の喜びが、描かれています。

この教えの前後のみ言葉の流れ——安息日の癒し、招きへの応答、塔を築く者、十字架を負う弟子、塩のたとえ——それらはすべて、主の憐れみに応答する、主の愛された忠実なしもべを整えられる主のみこころが示されています。ここに記された主の言葉を、道德的教訓としてではなく、主の愛に招かれた者として相応しく御心を尋ねたいと思います。

「婚宴に招かれたとき、上座に着いてはならない…むしろ末席に着きなさい。そうすれば、主人が来て『友よ、もっと上の席へ』と言ってくれる」

招かれた者

「婚宴に招かれた者」＝御国に招かれた者を象徴すると考えます(黙示録 19:9)。前後関係のたとえ、教えが主の日・終末に焦点が当てられています。招かれたこと自体を救いと捉えるのではなく、主の招きに対するしもべの整えと応答、主の決定された報いがここには描かれます。

上座と末席

上座に座る者の霊的本質とは、自分の義や立場を誇る者です。末席に座る者とは、主の憐れみによって招かれたことを喜び、主の為されることを受けとり、待つ者です。

主人の留められた御目・その語りによって席が変わる

「友よ、もっと上の席へ」＝主の主権に基づいて語られ、報いが与えられることが示されます。自分自身で上がるのではありません。高い座は、主の御そば近くであり、ただ主によって引き上げられる性質のものです。その座は、神ご自身がお定めになります。御国の宴においてその報いが表れます。そして、宴の場は、未来的な現実の信仰生活と乖離した領域だけを意味せず、これを霊的に黙想するなら、主の臨在による主の統治された勝利

の場、ともに喜ぶ領域としての、天においても地においても示される、救いの場、憐れみの場として見ることのできる領域でもあります。

自分を低くする者が高くされ、主の憐れみに応答した者が報いを受け、花嫁として整えられた者が、主によって席を与えられるという。御国の宴における主の秩序が示されています。

この教えは、ルカ 12 章の「夜中に目を覚まして主を待つ者への報い」、13 章の「狭い戸」、14 章の「宴の席」、15 章の「放蕩息子」、17 章の「しもべの働き(私たちは、役に立たないしもべです。なすすべきことをしただけです、と言いなさい)」などで語られたのと同じように、御国の視座で主の言葉を聞くべき教えです。黙示録 19 章の「婚宴」を思いながら、一つの霊的な流れの中で聞き取るべきものです。

主によって席を与えられる光景の中に、自分の義ではなく、主の憐れみに応答した者が、末席に座ったその座の中で、主の業を見、主の言葉によって引き上げられる。そのような光景です。

主は「高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高くされる」と言われました。

主に応答する者が、主によっているべき場所に導かれるのです。具体的には、「主の憐れみのうちに整えられた者」が、導かれる——それこそが、御国の秩序であり、報いの構造です。

ルカ 14 章の「上座のたとえ」(14:7-11) は、前後の文脈と結びつけて考察することで、御国の秩序について、一層鮮明になります。

前段(14:1-6)：安息日の癒しと沈黙する者たち

主は安息日に病の人を癒されるが、律法学者たちは沈黙しました。これは、憐れみに応答しない形式的律法主義への警告です。

そして、「上座に座る者」は、まさにこの沈黙する者たちの霊的姿勢を象徴します。憐れみに応答せず、形式に固執する者が、自らの義を自認して、主の報いを計算し、上座に座ろうとする姿です。

このとき、「末席に座りなさい。そうすれば主人が『もっと上へ』と言ってくれる」と、主の報いの日に、逆転する立場を描きます。

『取税人とパリサイ人の祈り』と同じ本質を示します。主はそこでも、パリサイ人が義と認められたのではない。憐れみを求めた取税人が義と認められた。「高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高くされる」と言われました。このところでも、主への「憐れみへの応答」が信仰として描かれています。

安息日の癒しと沈黙する者の形式主義に対して、憐れみに応答する者が報いを受ける教えとたとえがつながっています。そして、それに続いて、後段の「宴への招き」のたとえへとつながっていきます。

後段 (14:12-24) : 宴への招きと拒む者たち

主は「貧しい者、病んだ者、見えない者を招け」と語り、招かれた者たちが「畑を買った」「牛を買った」「結婚した」と言って断りました。最終的に、はじめに招かれていなかった者が席につくことになります。

節	主題	関連構造
14:1-6	沈黙する形式主義	憐れみに応答しない者＝上座に座る者
14:7-11	上座のたとえ	主の語りによって報いが与えられる秩序
14:12-24	招きと拒絶	応答した者が末席から引き上げられる構造

この流れは、憐れみに応答する者が報いを受け、主によって席が与えられ、招きを拒む者は退けられ、憐れみに応答した者が引き上げられるという、終末の宴という御国の出来事(憐みの救いの場)における神の御旨を悟らせるものです。

主は、パリサイ人・律法学者の偽善・形式主義を退けておられます。それが、御国の座を占有し、憐れみによる主の救いの働きを拒絶するからです。その自己義認の働きと目的は、「うちは、邪悪と強奪で満ちている」からです。

「あなたがたは、杯と皿の外側は清めるが、内側は強奪と邪悪で満ちている」 (ルカ 11:39)

救いに入ろうとするものを入らせないばかりか、相手を押しのけて、自らの利得(富・名誉・報い)を貪って、弱者を支配するからです。

主イエスは、誰が一番偉いか、と弟子たちが論じていた時、

「あなたがたの間では、いちばん偉い者は、いちばん若い者ようになり、上に立つ者は、仕える者ようになりなさい」 (ルカ 22:26)

ここで学ぶ、謙遜は、憐れみの主の御性質を共有する十字架を負うしもべの様です。

並行個所のマルコでは、「人の子が来たのは、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のための贖いとして、自分の命を与えるためである。(マルコ 10:45)」と示されています。

ルカ 14 章で、「わたしのもとに来る者が、父、母、妻、子ども、兄弟、姉妹を、さらに自分のいのちでさえも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。

自分の十字架を負ってわたしについて来る者は、だれでもわたしの弟子になることはできません。」と言われました。

17:10 の「私たちは、役に立たないしもべです。すべきことをしただけです」という語りがあります。一見すると厳しい響きを感じられる教えでした。

主は、そこで、「役に立たないしもべです」＝報いを求めない者の姿勢を示されました。これは、自己の義認を退け、主のなさる行為・みことばにのみ応答する者の霊的成熟を教えるものです。人を押しのけて、強奪する性質において、主の御業に与るのではないということです。主の救いと憐みの實際を前にして、自己の義による報いを求める人間中心の心を退け、主の憐れみによって立つ者の姿勢を整えるための諭しでした。

しかし、主は、主からの報いを求める者を退けておられるのではありません。報いを主に委ねるように整えておられるのです。

聖句	僕の姿勢	主の応答	報い
ルカ 12:37 夜明けまで目を覚ます		主が給仕する	忠実な者への逆転報い
ルカ 14:10 末席に座る		「もっと上へ」	主の語りによる引き上げ
ルカ 17:10 成すべきことをしただけ		主に委ねる	自己義を求めない成熟

すべて、主の招きに応答する者が、主によって報いを受ける姿です。「成すべきことをしただけです」は、報いを主に委ねる者の霊的完成の姿です。

なぜ主は教えられたのか

主は、「こう言いなさい」と命じられました。これは、そのように言うことによって心の姿勢を整える霊的訓練です。「言いなさい」とは、自分の心を主の御旨に合わせること、同意することです。つまり、主の祝宴が開かれている主の憐みの場、救いの場、勝利の場、喜びの共有の場で、すべての主の業・主の善・主の為された御業に対して、主の徳をうちに受け入れる者、つまり、憐れみに委ねる者として整えられるためです。この響きは、パリサイ人に対して、「うちのものを施しに用いなさい」と命じられたことに似ています。

一見すると厳しい響きを感じられる教えは、実はそれこそが、報いを主に委ねる者として整えるための、主の憐れみの諭しのことばでした。

それは、自己の義認を求めず、主の御声に応答し、忠実に祈り、主の憐れみによって報いを受けていくものとされる、終末に臨んで、花嫁として霊的姿勢が整えられていく主のビジョンかと思います。

「言いなさい」と命じられたこと自体が、主がしもべの心を整え、報いの器として備えておられる愛の業です。

報いを願うこと自体は悪ではなく、み言葉も肯定しています。しかし、報いを求める心が肉の性質に支配されるとき、憐れみを押しのけ、他者を退け、偽善の構造に陥る危険があることを、主は繰り返し語られています。

「私たちは、自分の持ち物をすべて捨てて、あなたに従ってきました」「神の国のためにすべてを捨てた者は、今の世でも、後の世でも、報いを受ける」(ルカ 18:28-30)

報いを否定されませんでした。しかしその直後に、「あとの者が先になり、先の者があとになる」と語られました。これは、報いが人の計算ではなく、主の憐れみによって決まることを示したものです。

報いを人との比較において計算するとき、肉の性質は、「自分が先に報いを受けるべきだ」と主張します。他者を押しのけ、憐れみを忘れ、パリサイ的な偽善の態度に類似しています。

だから、「成すべきことをしただけです」「役に立たないしもべです」と、報いを主に委ねる姿勢から、主のみこころを学ばせます。

「報いはある」と語られながら、「あとの者が先になる」と語られ、「末席に座りなさい」と語られ、「成すべきことをしただけです」と言いなさいと命じられた——それはすべて、主の日に、神の憐れみの場で喜びを共有する者として召されていることを示しています。

ぶどう園で働く労務者のたとえ(マタイ 20 章)の教えの核心と、この末席のたとえは、おなじ視座で読むことができます。

両者に共通する霊的構造

たとえ	外的構造	霊的核心
末席のたとえ(ルカ 14)	自分で上座に座る vs. 主に引き上げられる	主の語りによって席が決まる
労務者のたとえ(マタイ 20)	早く来た者 vs. 最後に来た者	主の憐れみによって報いが決まる

両者ともに、人の序列や努力による報いの計算を退けています。ただ、主の主権と憐れみによって報いが与えられる姿です。

「へりくだる者は高くされる」「後の者が先になり、先の者が後になる」という本質こそ、主の憐れみに応答するということです。

末席とは、自らを低くし、主に委ねる者の場所。そこには、主の憐れみによって集められた者たちが共に座しています。主の愛を共有し、互いを覆い、祈りの一致があるべき、慰

めの場です。そこでは、神の哀れみが展開しています。末席に座る者は、自分の義を誇らず、他者を押しのけず、主の招きによってのみ立つものです。互いに報いを競い、測るのではなく、主の愛が場を満たすそのような所に身を置く者たちです。それは、花嫁として整えられた者たちが、主の食卓に共に与る姿です。(※2 補足)

「主人が来て、彼らを食卓につかせ、給仕してくださる」 (ルカ 12:37)

主御自身が来て、彼らに給仕して下さいます。主の愛により、引き上げられ、ともに栄光に与る者として整えられた、しもべの立場があります。

その、終わりの日の報いの場は、憐れみの深さを見て救い主を崇める機会であり、整えられた者にとっては「共に喜ぶべき場」祝福を共有します。しかし、そうであるべきはずなのに、肉の性質がそれを拒むことに対して、御国の教えとして主は戒めを与えています。15章の、放蕩息子の兄の姿にも、ぶどう園の早朝の労務者にも、末席を喜ばない者にも共通した、主から離反するところがその所で現れ出ることのないようにと、終わりの日に向かって整えられるていくことを主は願われています。

報いの場には、神の主権に基づく、神の憐れみの証しがありました。

「あなた方に言いたいことがあります。病人を安息日に癒すことは正しいことですか」彼らは黙っていた。

もし兄が整えられていたなら、父の憐れみを見て、共に喜び、救い主を崇める者となっていました。もし早朝の労務者が整えられていたなら、主人の憐れみを見て、最後の者の報いを祝福し、その場は主人との喜びを共に喜んだ主の同労者としての栄光(主の御性質に与る)の報いを受けたはずで。もし末席に座ることを喜べるなら、主の主権によって引き上げられる者を見て、共に栄光に与る者となります。

報いの場は、整えられた者が主の憐れみを見て、共に喜び崇める場です。しかし、肉の性質はそれを拒み、自分の義を誇り、他者の報いを妬み、憐れみを押しのけます。

だから、終末のこの世、罪のこの世が、主の憐れみによって贖われるためには、花嫁として整えられた者が、憐れみの器として仕えることが不可欠なのです。

この態度がなければ、下僕たちは憐れみを伝えることができず、世は贖いの証しに触れることができないのです。これは花嫁として不可欠な態度です。

ルカ 14 章の「塔を築こうとする者は、まず座って費用を計算する」 (ルカ 14:28)

この、完成を目指す塔とは何でしょうか(※補足 2)。自分一人の人生のゴールだけではありません。主の住まい、花嫁の一致、終末の御国の完成の象徴(黙示録 21:2)と思います。費用を計算するこの態度は、主の憐れみを映す器として整えられるための覚悟と主の

御旨がなんであるかの識別です。主の憐れみを世に証しする者として立つために、何を捨て、何にすべてを捧げるのかを問うみことばです。

自分の義を捨て、他者の報いを祈り、主の憐れみの深さにゆだねて求め、主の哀れみに応答する者として自分を捧げて、塔(一体の人、天の御国、この世の贖い)の完成に与る者となるという、塔を築く者は、終末の一致と完成に向けて整えられる者の象徴だと思います。

「自分の十字架を負って私について来なければ、私の弟子にはなれない」 (ルカ 14:27)

十字架＝自己を捨て、主の憐れみを映す器として仕える道です。弟子＝主の性質に与り、世に対して主の心を証しする者です。

肉の性質を十字架につけ、最終的には、主の似姿とされた者は、罪の世の隣人・友となって、そのすべてを救いのためにささげるのです。主の性質に与る者として、世に贖いの証しを現す者とされるのです。

あるいは、その対象は主の集会として、一体の人を指して学んでもよいと思います。本質的には同義です。

その者は、主の哀れみの招きに応答するしもべとして整えられ、主によって引き上げられ、主の食卓に与ります。そして、主のご性質に与る者として、世に対して「塩」としての働きを為します。

「塩は良いものです。しかし、塩ももし塩気をなくしたら、何によって味をつけるのでしょうか」 (ルカ 14:34)

世にあって、主の憐れみと真実を映す存在です。腐敗を抑え、味を与え、主のご性質を自分自身のうちに保つ者です。塩気を失うとは、主の語られたみことばに応答することをやめ、憐れみを押しのけ、自己義認に傾くことです。塩気を保つ人は、主の御言葉のうちにとどまり、主の憐れみに応答し続ける仕えるしもべです。

「耳のある者は聞きなさい」 (14:35) と主は言われました。これは、ルカ 14 章全体の語られたみことばを、道徳的教訓として聞くのではなく、御国の完成、終末の報いとして聞き取るようにとの、主の招きです。

安息日の癒しに始まり、上座のたとえ、宴への招き、塔を築く者、十字架を負う弟子、そして塩のたとえ——すべて、主の憐れみに応答する者が、主の語られたことばによって整えられ、世に対して主のご性質を証しする者として立つための霊的訓戒です。

塩気を保つとは、主の言葉(愛)にとどまり、憐れみの器として整えられ続けることです。主のみこころに応答する者として整えられる弟子であることを主は求められました。

この章全体もまた、花嫁として整えられる者の姿を描いています。

(※補足 1) 末席

末席は、霊的に低い者が座る場所ではなく、霊的に整えられた者が選ぶ場所です。主が引き上げるのは、「末席に座るにふさわしい者」ではなく、「末席に座ることを喜ぶ者」です。そこに座る者は、主の招きによって引き上げられ、御そばで主の食卓に与る者とされていきます。末席は、主の憐れみを待ち望む者の場所であり、主の憐れみが実際として現される応答の場です。

(※2 補足) 塔を建てる

主がなぜ「塔を建てる」という比喻を用いられたのか。

塔(πύργος)は、旧約ではしばしば見張りの場、都市の守り（ネヘミヤ記、イザヤ書）、誇りの象徴（バベルの塔）として登場します

霊的に高く立ち、完成を問われる構造物としての象徴です。聖書の文脈を踏まえると、塔は終末の整えと証しの完成を問うものとして読まれるべきと考えます。

ギリシャ語「πύργος」の意味は以下の通りです。

- ・ 塔、砦、見張り台、都市の防御構造
- ・ 高くそびえ、遠くからも見えるもの

1. 塔は「見えるもの」＝証しの構造

- ・ 塔は高く立ち、外から見えるものです。それは、整えられた者が世に対して主の心を映す証しの象徴です。

2. 塔は「完成が問われる」＝一致の成熟

- ・ 「途中でやめれば笑われる」＝整えられることなく、不完全な者は、証しにならない。塩気のない塩となります。塔は、花嫁としての一致と成熟が完成した者の象徴です。

3. 塔は「計算してから建てる」＝識別と応答

- ・ 「まず座って費用を計算する」＝主の御旨に応答するために、何を捨て、何を取るかを識別する姿勢が不可欠です。

「塔（πύργος）」は、建築物を指すのではなく、整えられた者が世に対して主の愛の栄光を表す証しの象徴です。その証は、高く立って見られるべきものですが、人の誇りを立てるものではなく、憐れみにより支えられる構造です。完成のための整えとして、内に一致と成熟があります。完成が問われるとき、肉の力の結集ではなく主のみ旨(ここでは憐れみ)の一致(主の心を心とする)によって、完成するものです。完成した塔は、この地に主の憐れみの高さを映すものとなります。その塔が完成したとき——花嫁として整えられた者を通して、御心が果たされるために建てられる終末の証しを覚えさせられます。